
夢

葵羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢

【コード】

N6607A

【作者名】

葵羽

【あらすじ】

ちよつと(?)組織が絡んでいます。明るいつていう程明るい話じやありません。でもコ哀ですよ(笑)

・・・組織とお姉ちゃん・・・

「今日は家で2人で食事しようね」

「はいはい、分かってるって」

「分かってるって言うけど昨日も一昨日も
”研究が長引いた”って言うって私1人で夕食食べてるよ？」

「今日は絶対に帰って来るから！　ね？志保」

「お姉ちゃんの言う事なんてアテになんないよ」

「ハハハハハハハハ！」

あ、外の誰かが居る…　誰だろう？

男の人が2人…　黒くて大きな車だ…

「お姉ちゃん、窓の外に誰かが居るわよ。」

「こつちを見てるけどお姉ちゃんの知り合い？」

「え？　誰だろう？」

「知らない人なら放っておいた方が良くいわね」

「　　」

「どうしたのお姉ちゃん？ 顔が強張ってるけど…」

「どうして… どうしてあの人達が…」

「お姉ちゃん知ってる人なの？もしかして元彼とか？（笑）」

「ちょっと外に行ってくる！」

・・組織とお姉ちゃん・・（後書き）

連載始めます！

まだ全然この先の話考えません（汗）

ゆっくりながらほぼ毎日更新しますので
読んでみてください

・・・夢・・・

バーン！バーン！

銃声！　もしかしてお姉ちゃんが撃たれた！？

バサッ

「はあはあはあ…　最近組織の夢ばかり…」

哀の隣には博士が鼾をかいて寝ている。

「夢にはいつもお姉ちゃんが…」

ポタッ　ポタポタポタポタ

哀の目から大粒の涙がこぼれた。

（過去はどうやったって変えられない…
だから今があるのよね…）

* * 次の日 * *

8時10分。いつもの5人で登校。

「昨日のサッカー見たか？」

「もちろんです！ 東京スピリッツ勝ちましたね〜」

「哀ちゃんはサッカー見た？」

「見てないわ。昨日はちょっと疲れてたからすぐ寝たの」

「そっか〜！ 哀ちゃんって真面目な子だね！」

「え？ どうして？」

「だって昨日サッカーやってたの9時だよ？」

9時に寝るなんて良い子じゃなきゃ出来ないもん！」

「そ、そう…。」

哀はサッカーをやってる事自体知らなかった。

「お前、嘘ついたらろ」

コナンがいきなり声をかけてきた。

「私がいつ嘘をついたのよ？」

「『疲れてたからすぐ寝た』なんて言ってるけどどうせまた夜更かししてたんだろ？」

「昨日はちゃんと寝たわよ」

「ふ〜ん。お前がねえ…。」

「何よその顔。誰のために夜更かししてまで研究してると思ってるの。」

「少しは感謝しなさい」

「感謝してるよ。 だけどそこまでしなくても…」
「ゴチャゴチャうるさいわね。 もうほっといて」

「明日どっか行かない？」

コナンが哀に言った。

「え？ 何でいきなり」

「何となくお前と何処か行きたくなくなった」

「何で私なのよ。 そういつイベントは子供達の方が喜ぶと思っけど」

「お前も今は子供だろ」

「そうだけど…」

「何処行きたい？」

「だからどうして私なの？」

「だってお前… 最近様子おかしいじゃん」

コナンから意外な事を言われた哀は少し驚く。

「別におかしくないわ。 きつと疲れてるせいよ」

「そんなじゃなくて… もっと違う表情っていつか…」

「疲れてる時はほんの少し今と違う顔してるし…」

「どうして私の表情をミクロン単位で把握してるの？」

「あ、いや、それは… ハハ」

「とにかく私は何でもないから別の人と行きなさい。 じゃ」

そう言って学校へ行ってしまった。

・・・夢・・・(後書き)

更新遅れてしまいましたっ！

次話を書くにはどうすれば良いか分からなかったんですよ(汗)
機械音痴なんです…

今度からはきちんと更新しますのでv

・・・約束・・・

午後7時30分。

学校から帰ったあとは特にやる事もなく
雑誌を読んだり博士と一緒にテレビを見ていた哀。
夕飯も終えて部屋でくつろいでいた。

ピリリリリリ

哀の携帯が鳴った。

メールだった。

哀は誰だろうと不思議に思いながら携帯と開いてみると...

「 題名：灰原へ

本文：明日何処行く？

俺は灰原が行きたい所なら

何処でも良いよ。」

と書いてあった。

哀はすぐにコナンからだと分かった。
そして哀はすぐにメールを返す。

「 題名：行かないわよ

本文：私は疲れてるの。

何処にも行かないわ。

彼女や子供達と行ったら？
」

哀は行きたくなかった。

最近変な夢を見るから。

夢なのに

夢なんだけど

夢だけど

怖いから。

夢には組織が出て来る。

それはただの夢。

自分だけの夢。

でも現実になりそうでもって怖かった。

哀には失うものが多すぎた。

母、父、お姉ちゃん。

ピリリリリリ

「 題名：そんな事言うなよ

本文：明日ぐらい外に出ようぜ。

俺お前と何処か行きてえもん。

じゃあ朝10時30分に俺が向かいに行く。

っていうのは？

「

(まったくしつこいわね)

「 題名：はあ…

本文：分かったわよ。

あなたのしつこさには負けたわ。

その代わり全部あなたのおごりね。

「

ピリリリリリ

「 題名：ヨッシャー！

本文：ありがとな。

明日10時30分に向かいに行く。

「

こうして明日の予定が約束された。

でも哀はとても怖かった。

(馬鹿ね私… 夢なんだからこんなに気にする事ないじゃない)

ガチャ

哀はあるカセットテープをかけた。

『志保、11歳の誕生日おめでとう』

お母さんの声が入ったテープ。

それはお父さんの家のトイレから見つけたものだった。
いつ聞いても懐かしい。

(お母さん… 明日はずっと天国から私の事を見ていてね…)

・・・約束・・・（後書き）

更新します！

ドンドン哀ちゃん心が晴れていきます
次話をお楽しみに（え

・・・夢と現実・・・

＊＊ 次の日 ＊＊

午前10時30分。

哀はいつもと変わりない服を着て待っていた。

「それより哀くんと新一は何処に行くんじや？」

「さあ？ 私は誘われたただだから何も知らないわ」

「って事は新一が誘ったのか？」

「ええ。行かないって言うてもしつこくしつこく来いって」

「わしはテツキリ哀くんが誘ったもんじやと思ってたわい」

ピンポーン

ガチャ

「よお！ 灰原。 もう行こうぜ」

「え！ 行くの？」

「ああ。 だって10時30分になってるだろ」

「それはそうだけど・・・」

「ほら、行くぞ！」

コナンは哀の手をとって歩いた。

(新一も結構やるのお)と博士は思った。

「それで何処行くの？」
「それはお前が決めるんだろ。俺はお前が行きたい所に連れていくんだから」
「は？ 誘ったのはあなたなんだから決めるのはそつちでしょ」
「ん〜〜…じゃあ公園」
「公園!？」
「そう、公園」
「こんな10時30分からどうして2人で公園に行かなくちゃいけないのよ。公園だったらいつでも来れるじゃない」
「まあまあ、そう怒るなよ」
「怒ってないわよ」
「そうか？ ま、どうでも良いや。兎に角公園に行こうぜ」
「はあ…」

＊＊ 米花公園 ＊＊

「それで？ わざわざ公園で何する気？」
「まずはずっと聞いたかった事を聞いておく」
「何よ」
「お前の様子がおかしい理由」
「だからそれは疲れてるからって」
「そんなんじゃないんだろ。本当の理由は。」
「もつと何かがあるんだろ？」
「…いのよ。怖いよ。最近」

哀が強め口調で言った。

「怖い？ 何が？」

当然のようにコナンは理由を聞いてくる。

「最近変な夢を見るの」

「変な夢？ また前みたいに組織が出て来るとか？」

「ええ。それに最近の夢はお姉ちゃんも……」

「宮野…… 明美さん……」

「一番怖かったのは組織がお姉ちゃんを殺す夢。

食事中にお姉ちゃんが外に出て行ったら銃声が鳴って……

そこで目が覚めたんだけど……」

「でもそれはただの夢なんだろう？ 現実じゃないんだし……」

「それでも怖い。もし本当に組織が私の前に現れたらって

考えると……」

そう、考えると本当に現れそうで怖い。

前に工藤君が言っていた”その時”が来るみたいで。

・・・夢と現実・・・（後書き）

どうも^^^

最近期末テストやらでお母さんに

怒られてばかり（笑）

「中2の勉強が1番大事なのよ！」と怒鳴られています（汗）
それでもPC開いて小説更新。

・・・守る理由・・・

「俺が守ってやるって言っただろ」

「え？」

「前にも言ったけどお前の事守ってやつから心配すんな」

「でも… あなた1人でかなうような相手じゃないわ…」

「そんな事分かってる」

「じゃあどうして？ どうして殺されるような事するの？」

「あなたが組織を潰しに行ったところで何も出来ないじゃない。

そうしたらあなたは絶対に殺される」

「どうしてお前は可能性に賭けないんだよ！」

「え」

「確かに組織の奴らにかなわないかもしれない。

でもそれが100%じゃない。1%くらいは勝つ可能性だって

あるだろ。

やる前から負けた気で居るんじゃない。いつまでたっても勝てない。

奴らを潰すにはそんなくらいの考えでいねえと…」

「あなたは何も分かっていないわ。気持ちだけでどうにかなるなら

とつくに彼らを倒してるわよ。あなたのように勝った気で居ら

れるわけじゃない。

私は彼らの本当の強さ、冷酷さを知っているから… だから…！」

「もう良いよ」

「え？」

「俺は素直にお前を守りたいって思った。

組織を潰してお前と幸せになりたいって思った。

そしてお前の笑顔が見たいって思った。

だから俺は可能性に賭けてあいつらと戦おうとしてるのに
お前はこの気持ちを受けてくれないんだな。 だったらそれで良
い。

俺にはおもう前を守る理由はない… じゃあな…」

「あ、ちよつ、ちよつと工藤君！」

コナンは哀をおいて帰ってしまった。

(どうしてよ… あなた1人で彼らを倒せるわけないじゃない…
私はあなたのために…)

哀の頬を涙が伝う。

(家に帰る…)

そして哀も家へ帰った。

・・・守る理由・・・（後書き）

どもども〜^^

この先のストーリーどうしましょ？

全然考えてないのでヤバイです（え

誰か私にアイデアをください〜）（笑）

・・・喧嘩・・・

＊＊ 阿笠邸 ＊＊

カチヤ

哀は博士に気付かれないようにゆっくりドアを開けた。

(泣いていたことなんて知られたくないし…)

「おお！ 哀くん！ おかえり」

「えっ、あ、博士… ただいま」

「どうしたんじゃ哀くん？ 何か様子が変わじゃぞ？」

「何も変じゃないわよ。 それより今日は研究に没頭するから私の部屋に入らないでね」

「お、おお…」

「じゃあ、夕食になったら呼んでね」

トタトタトタトタ

哀は階段を下りて地下の研究室に向かった。

(哀くん…？ そうだ！ 新一に聞いてみれば良いのじゃ！)

博士は受話器を取り、コナンの携帯に電話をかけた。

ブルルルルル

『もしもし？　ってか博士だよな？』

「ああ、そうじゃ」

『博士が何の用だよ？　もしかして新しい発明品が出来たとか！』

「違うわい」

『じゃあ何だよ。　今蘭たちと近くのレストランに来てるんだ。』

灰原と別れたあと蘭から電話があつてな。

組織絡みのことは今話されるとまずいな』

「そんなことじゃないぞ、新一。　哀くんの様子が帰って来てから

おかしいんじゃない」

『ゲツ…』

「ゲツて何じゃ？　哀くんと何かあつたのか？」

『別にたいしたことないよ。　で？　灰原の様子がおかしいってい

うのはどういうところか』

おかしいんだよ？』

「んう…　少し悲しげというか寂しげというかそんな表情をしておつたんじゃ。

わしが声をかけたらすぐに普通の顔に戻しておつたがのお」

『そ、そうか』

「新一、哀くんに何か言ったのか？　きつい言葉を…」

『だから何でもねえって…　あ、蘭が俺を怪しがってる。』

そろそろ切るぞ。　また今度電話してくれ。　じゃ』

「お、おい新一！」

ツーツーツー

(新一…　逃げおつて…)

* * 地下室 * *

地下室で哀はパソコンをしていた。

(私… 工藤君に嫌われちゃったかな…)

プルルルルル

「あ、電話… 工藤君からだ…」

(今は工藤君と話したくない… 電話に出たくない…)

プツッ

哀はコナンからの電話に出ずに携帯の電源を切った。

・・・喧嘩・・・（後書き）

今回の話で少しコナンと哀ちゃんが
距離を置きました。

この先の話、どうしようかな？

・・・気になるヤツ・・・

その頃コナンは小五郎たちと車に乗っていた。

ツーツーツー

「お、おいっ！」

(まったくアイツ… 何で俺の電話に出ないんだよ)

「コナンくん、誰に電話かけてるの？」

蘭が横から声を出した。

小五郎はどうせ阿笠博士だろ。と言っていた。

「博士じゃないよ！ クラスの友達」

「もしかしてコナンくんの好きな子？ それとも彼女？」

「おいおい、小1のガキに彼女なんているワケねえだろ！」

小五郎が言う。

「でも今時の子供は付き合ってるんじゃない？ ねえコナンくん？」

その子も彼女とかなんでしょ？」

「ち、違うよ… けど…」

「「けど？」」

「ちょっと気になるヤツっていうかほっとけねえヤツっていうか…」

「ねえ、コナンく〜ん、誰？ コナンくんのス・キ・な・ひ・と

！」

「好きな人じゃないよ！ 気になってる人だよ！」

「コナンの気になってる人っていつも遊んでる少年探偵団とかいう

団体の中にいる女子じゃねえのか？」

「どうして?」

「2人とも感じが似てるのよね。 ちょっと大人っぽいところとか
何でも知ってるところとか」

「あ、このこと、誰にも言わないでね! 歩美にも… もちろん灰
原にも…」

「もちろんよ。 っていうことはさっき電話してたのは哀ちゃんだ
つたの?」

「うん。 だけど電話に出てくれないんだよ」

「え? どうして?」

「さあ… よっぽど僕のことを嫌いなのかな」

「そんなことないんじゃない? 哀ちゃんはきつと地下鉄に乗って
るのよ!」

「ち、違うよ。 さっきは家に居たらしいし」

「もしかしてコナン、もう振られたんじゃないかねえか? 俺も電話に出
たくないほど

嫌なヤツから電話がかかってきたら電源ごと切っちまうからな。

特にあの妃英理っていうヤツのときはな」

「ちよっとお父さん!」

どンドン話がそれて蘭と小五郎の2人の話になっていく。

コナンはその2人の会話に入らずあることを考えていた。

どうすればまたアイツと楽しく話せるのだろうか、ということ

・・・気になるヤツ・・・(後書き)

どうもです

んう… この連載小説は一体どんな

終わり方になるのでしょうか。

作者も気になっているところですよ(おい

・・・避ける・・・

そして次の日になった。

今日は7月5日。

いつものように5人で学校へ登校している。

だがコナンと哀はいつものように肩を並べて歩いていない。

哀の方が一歩、いや、二歩三歩ばかり後ろに下がっている。

それには探偵団3人もちよつと不安になってきていた。

「どうしたんでしょうか、あの2人」

光彦が小声で歩美と元太に言った。

「どうしたんだろうね。何か2人の間に変な空気が流れるっつてい
うか……」

「俺もさっきから気まずかったんだよなあ……」

「でも僕達には何があったか分からないのでどうする事も出来ない
ですよね」

「じゃあ学校に着いたら哀ちゃんに何があったか聞いてみるね！」

「それでは僕はコナンくんに聞いてみます！」

「少年探偵団ゴー！」

＊＊ 1年B組の教室 ＊＊

「哀ちゃんコナンと何かあった？」

歩美は教室に入った瞬間真っ先に哀の方へ走っていった。

「別に何も無いわ。 どうして?」

「哀ちゃん、今日コナンちゃんと何も喋ってないでしょ?」

「そうだけど…」

「いつも何か喋ってるのにどうして今日は喋らないのかなって思ったの」

「今日は江戸川ちゃんと話す気分じゃないのよ」

「ふ、ふん…」

「おい、コナン。 灰原と何かあったのか?」

こちらは光彦・元太側である。

光彦と元太はコナンを廊下に呼び出して立って話をしているのだ。

「あ?」

「今日の朝は雰囲気が違いましたよ。 いくら子供の僕達とは言え

コナンちゃんと灰原さんの空気が違ったことくらい分かりますよ」

「コナン、何があったか言えよ! このまま灰原とずっとあのまま
で居るのか?」

何があったかは知らねえけどよお、早く今まで通りにしろよな!」

「…俺が喋りたくても喋れないんだ」

「えっ?」

「それ、どういうことだ? コナン」

「ちょっと色々あったんだ。 休みの日に」

「そうなんですか… それでああいう雰囲気に?」

「ああ、ちょっと俺もキツイこと言っちゃまってよお。 アイツを責めるような言い方を」

しちまつたんだ。そしたらアイツ、俺を避けるようになって…」

「灰原に何を言っただんだ？」

「それは言えない。…こつちの話…」

「こつちの話？ 何だよそれ」

「元太くん… コナンくんが言いたくないことなんです。何を言っただか」

「聞かないでおきましょう」

「…だな」

「それで喋りたくても喋れないってどういことですか？」

「それは」

キーンコーンカーンコーン…

「あ、1時間目開始のチャイムです！」

「早く席につかないとなっ」

「じゃあコナンくん、またあとで話しましょう！」

がたがたがたがた

先生が教室に入る何秒か前に子供達は自分の席について授業の準備をし始める。

もちろんそれはコナンと哀もで隣り同士の席の2人にはとても苦痛な時間が続いた。

(あー やべえな… 話したいけど言葉が出ない…)

(どうしよう… 今までずっと話さないようにしてきたけどこつちで話されたら無視出来ないじゃない…)

・・・避ける・・・(後書き)

更新遅れました！

明日も学校休みだイエーイ(何このテンション)

・・・決断・・・

「それじゃあ1時間目は図工です。
今日は隣りの席の子と向かい合わせになって
顔を描きあいます」

『ヤッター!』

クラス中の子供達は国語や算数じゃないちょっと
遊び系の教科で喜んでいいる。

その頃光彦・歩美・元太の3人は…

(こんな時に限って図工かあ…あの状況で2人が
仲良く描きあうなんて無理だよ…)と思っていた。

がたがたがた

子供達が机を向かい合わせにし始めている。
それにつられてコナンと哀も机を動かす。
皆に白紙が配られた。

「色はあとから絵の具でつけます。今日は鉛筆で
大体の顔を描くところまでします。
それでは始めてください」

皆が一斉に鉛筆を持って描き始めた。
ほとんどの子供達は喋りながら描いているが
コナンと哀は無言で、しかも正面を向いていない。
2人とも顔なんて見なくても描けるから良いやというよつな考えら

しい。

こんな感じが40分くらい続いた。

「ちょっとコナンくん、灰原さん」

先生が近付いて来た。

「なあに？ 先生？」

コナンは子供っぽく喋った。

「ちゃんと顔を見て描きなさい。

いくら記憶力が良いからって顔も見ないで… ん？」

先生はコナンと哀の様子がおかしい事に気が付いた。

「どうしたの？」

先生は2人に聞くがコナンも哀も答えない。

しばらくの沈黙

キーンコーンカーンコーン…

「皆さん手をとめてください」

先生はクラスの皆に聞こえる大きな声で言った。

そして机を元に戻すよう指示する。

コナンと哀もそれに従って元に戻すが机と机の間には2cmくらいの間隙があいていた。

パサッ

横から哀の机の上に紙切れがとんできた。
何だろうと思いいその紙切れを開いてみる。

【 放課後、学校の屋上で。 コナン 】

と書いていた。

哀は思わずコナンの方を見るとコナンは哀と目が
あった途端に目を逸らした。

「絶対来いよ」

小さな声でコナンは哀にそう告げた。

・・・決断・・・（後書き）

今日も更新出来て良かったです
そろそろ最終回も考えたほうが良いのかな？

・・・仲直り・・・

＊＊ 放課後 ＊＊

コナンも哀も委員会があつた。

コナンは体育委員会、哀は図書委員会だつた。

小学1年生でも委員会があるというのがこの小学校の特徴でもあつた。

哀は委員会が終わるとポケットから紙切れを取り出し

何かを考えてから足を動かした。

(やっぱり行かなくちゃ…)

哀はドンドン階段の方へ歩いていく。

一方コナンは哀よりも10分くらい前に委員会が終わっていた。体育委員会はやることが少ないらしい。

コナンは屋上の柵に体をもたれかけながら哀が来るのを待っていた。

もしかしたら来ないかもしれないと思い始めていた頃

ガチャ

屋上のドアが開いた。

哀はゆっくりゆっくりドアを開けコナンは哀の姿が見えるまで

ドキドキしながら待っていた。

やっと哀の足が屋上へ入った。

「来てくれたんだ」

「呼ばれたもの。行かなくちゃいけないじゃない」

「そっか」

コナンは哀に何と言おうか色々考えていた。

少し沈黙気味になったがそれを破ったのは哀だった。

「用事は何なの？」

コナンはまだ言葉がまとまらないらしい。

ようやく言葉が見付かったコナンは哀に言葉を投げかける。

「どういう事かは知らないけどどうして俺を避けるんだよ」

哀は下を向き小声で言った。

「…あなたと一緒にいるのが嫌だったのよ」

「何でだ？ そんなに俺の事が嫌いなのか？」

「違うの。あなたに捨てられるのが怖かったの」

「え？」

「あなた、この前言ったじゃない。もう私を守る理由はないって。だから私… もう守られないんじゃないかって。」

もう捨てられたんじゃないかって… 思ったら…」

「それはお前の勝手な想像だろ？ まだ「守らない」って直接言ったワケじゃないんだしどうして」

「言われるかもしれないでしょ！ あなたと喋って」

あなたに「もう守らない」「って言われるかもしれないと思ったら
あなたと喋りたくなくて……」

「俺はお前が受け入れてくれなくても守るつもりだぜ」

「え？」

「約束しただろ。 ヤバくなったら俺がどうにかしてやるって。

その約束はずっと守るつもりさ。

でもそれをお前が受け入れてくれないんじゃないのか？」

「……期待してるわよ……」

「へ？」

「あなたなら本当にどうにかなりそうなもの。

私はあなたを受け入れるわ。

だからこれからも……… 守ってよね」

「ああ。 もちろん！」

こうしてコナンと哀の関係は解決である。

・・・仲直り・・・(後書き)

今日も更新します。

最近暇で暇でございしょうもありません(え

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6607a/>

夢

2010年11月24日16時22分発行